

iv. 諏訪之瀬島での取り組み

諏訪之瀬島実習生 手嶋浩之

はじめに

私の目標は、小学校教員になることである。

しかし私にとって、それは最終ゴールではなく、プロセスの一つである。教育を求めている世界中の子どもたちの中に入って、教育を通して彼らの手助けをする、それが現下の私の最終目標である。

現在、世界の大部分の人は、貧困と紛争の絶えないアジア・アフリカ地域に住んでいる。そこには、学校にも行けず働かざるを得ない裸足の子どもたちがたくさんいる。私は個人的に、フィリピンのパヤタスという、ゴミの山で生活している子どもの実態に関心を持ってきた。そこでは意外にも、「ここで暮らしていても幸せ」という意見を持つ子どもが多いと聞く。それはなぜであろうか。色々なモノに恵まれて、何が幸せなのかが分かりにくくなっている私たち日本人には、彼らの心情を感覚的に理解することは難しいであろう。しかし私は、様々な関連レポートに接していくうちに、それは、そこで生活している人々のコミュニティが子どもたち一人ひとりを守っているからではないかと思うようになった。

トカラ列島に代表される「へき地における教育」の良さは、学校と地域のコミュニティによって「子どもたち一人ひとりが守られている」という点にあると考える。十島村の学校教育方針である「自他の生命を大切にし、思いやりと人間尊重の精神を基本に基礎学力の向上を目指し、子ども優先の立場に立って心の通い合う教育」の文言から、人とのふれあいをかけがえのない大切なものと受け留めさせようとする教育姿勢を感じた。そしておそらく、トカラ列島では（私が理想視している）人間愛にあふれた、手本にするべき教育実践が日常的になされているのではないかと考えた。

私は日頃から、あらゆる種類の教育の根底に、「伝える」と「対話」の二点がなくてはならないと考えている。これは、人として「生きる意味とは何か」という問題にも連関する非常に重要なキーワードである。対応する人数が多ければ多いほど、これらは失われていってしまう。十島村のように、人と人の関係が密であることは、対話の豊富さにつながる。今でもこのような大切な人間関係が残っているトカラ列島こそ、私のこの教育観をさらに成長させてくれるのではないかと考えた。

十島村での研修は、私がいざ世界に出ようとするときに、きっと大きな支えになってくれるだろう。また「生きる」という大きな意味を教えてくれるはずである。へき地教育について無知な私が、それらの意味をより深く学ぶためには、研究会や資料等で知識を深めることはもちろん、実際に現地の風を受けて感じることも、最も重要な学習であると考えた。トカラ列島の学び舎で、子どもたちと共に有意義な時間を過ごすことが出来たことは、私の学生時代の最良の研修成果の一つとして、今後永く記憶される。

1. 諏訪之瀬島について



諏訪之瀬島と御岳



(1) 諏訪之瀬島の自然と暮らし

諏訪之瀬島は、周囲 27.15km、面積 27.66km²、人口 52 人(2006.7 末)、最高点 799m (御岳)の、トカラ列島のほぼ中央に位置し、面積は中之島に次いで 2 番目に大きい島である。島北部に活火山の御岳(おたけ)があり、手つかずの自然が多く残っているため、溶岩台地にはマルバサツキが群生し、春になれば一面ピンクの花を咲かせる。またトカラヤギなどの動物も多く生息している。

しかし、御岳は現在でも週に一度の頻度で小規模の噴火を繰り返している。危険防止のため、島民の居住地域は限られ、集落は最南部にのみ存在する。東の切石港からは一本道になっており、徒歩 30 分ほどで西の元浦港に辿り着く。民家のほとんどはこの道路沿いに集まっている。南部の高台には、トカラ列島唯一の飛行場が設置してあるが、現在は閉鎖され、緊急時に隣接するヘリポートが使用されるのみである。諏訪之瀬島は 1813 年に御岳の大爆発があり、一時期、無人島になった歴史がある。明治 16 年(1883)に奄美大島出身の藤井富伝らが入植して以降、有人島としての歴史を守っている。従って他の島々と異なり、島独自の文化というよりも奄美の風習が色濃く残っている島である。

島民の多くが、奄美大島からの移住者または子孫である。昭和 40 年代に諏訪之瀬島に押し寄せた、いわゆるヒッピー*の子孫も、集落の北部付近に集まって暮らしている。また他の島に比べて歴史が新しいためか、この島には総代と呼ばれる人はいない。竹細工など島の文化に非常に精通している人は、島民や本土から派遣されている教職員から非常に敬われている。

温泉やビーチがないため、島の人いわく「何もない島」である。しかし島民は非常に温かく社交的で、諏訪之瀬島の新しい文化を創りあげていこうとする考えを誰もが持っている。また私の滞在期間中に、切石港で 48cm もの魚を釣った人がいたが、このように釣りのスポットとしても知られる島である。

図 1. 諏訪之瀬島の地図

出典:十島村役場ウェブページ

<http://www1.tokara.jp/contents/profile/suwanose.html>

* 自然への回帰を主張し、伝統・制度など既存の価値観に縛られることを否定する青年集団。



切石港より東シナ海を望む



トカラ列島唯一の空港

(2) 平島小中学校諏訪之瀬島分校の教育体制

在籍数は7名（小学生4名，中学生3名）と，トカラ列島にある学校で最も少ない．全7名中，山海留学生は0名，教員子弟は1名．純粋な島生まれの子は1名のみである．小学部（単式1クラス，複式1クラス）と中学部（複式1クラス）は，授業は別に行っているが，行事や創意活動（学校裁量）は合同で行われることが多い．また，給食は小中合同でランチルームにて行う．昼休み時間は，缶蹴りやゲートボールなどの遊びに全職員が参加し，分校の伝統の一つになりつつある．

教職員は7名．校長先生は常駐せず，年に数回，平島の本校より来訪する．学内に教員住宅が設置してある．学校の施設については，中学校校舎，小学校校舎，特別教室，給食室とも規模は小さいものの一般的な学校と遜色ない．ただ体育館が建設計画中のため，体育や行事等は特別教室や集会室で行われる．

「徳・知・体の調和のとれた人間性豊かな実践力と忍耐力のある児童・生徒の育成を図る」という教育目標のもとに，「やさしく・かしこく・たくましく」という校訓を掲げている．地域の特色を生かした教育活動が多く，総合的な学習の時間や創意の時間では，「竹の子とり」や「笹ぶき屋根小屋作り」を行っていた．



平島小・中学校諏訪之瀬島分校



諏訪之瀬島分校から見える東シナ海

2. オリジナル授業

(1) 学習指導案

創意の時間学習指導案

指導者： 手 嶋 浩 之
学年・学級： 全校児童4名，全校生徒3名
場 所： 平島小中学校諏訪之瀬島分校多目的教室
日 時： 平成18年9月14日（木）第4校時

1. 題材名 「すわのせっこソングを作ろう！」

2. 題材について

(1) 教材観

授業担当者があらかじめ用意した既存のメロディに、子どもたちがつくった歌詞をあてはめて楽曲を完成させ、最後に演奏しようとするものである。子どもたちに作詩活動及び音楽交流活動をさせることにより、へき地教育の特性と思われる、豊かな自然の中で行うことでより高い効果が期待される環境教育や、少人数ゆえ個々の子どもの特質を考えながら展開する「個に応じた」教育、そして地域社会に根ざした活動を行おうとするものである。また郷土を題材とする作詞活動をさせることにより、自主的な形で郷土愛を育むことができると考えた。

本授業は、该校の「創意の時間」の枠組みの中で行うが、ここには国語要素・英語要素（中学生）が含まれており、『学習指導要領』が定めている国語科の目標の一つである「思考力や想像力及び言語感覚」を体得する端緒にしたいと考えている。また作詩活動を通して、知識や技能はもとより、自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成したいと考えている。

(2) 児童観

児童生徒合わせて7名が在籍している。一人ひとりが進んで行動でき、明るく心やさしい子である。しかし長期間の島暮らしを経験している子はほとんどおらず、郷土についてどれほど理解し、愛着があるかは分らない。

(3) 指導観

児童生徒の実態を踏まえた上での指導が必要であることはいうまでもない。当然、事前調査が児童観を持つ上で重要となる。また学習の中心は、言語教育と郷土教育に注がれ、言語コミュニケーションにおいて重要である「対話の機会」を増やすため、授業では様々な談話階層を提供し、課外活動による位相階層の拡大を積極的に行う。

完成した曲は贈呈し、「形に残る交流活動」によって、児童生徒がいつまでも郷土愛を持ち、語り続けられる一つのきっかけにしたいと考えている。

3. 単元の目標

- 他の地域について知ることにより，異文化に関心を持つとともに，自分達の住んでいる郷土の文化や伝統を尊重できる．[関心・意欲・態度]
- 日本語で作詩することによって，古くから受け継がれている日本語の音の成り立ちやリズムを知る．シンプルな英語で作詩することによって，詩本来の構成要素を知る．
[知識・理解]
- 郷土について考え，詩を推敲する上で重要な，言葉の持つイメージについて深く考える．
[思考・判断]
- 詩の発表を通して，伝えたいものを明確に表現する．[表現・表現]

4. 単元構成

小学生は日本語で，中学生は英語で作詩を行い，それぞれAメロ部分を4行担当する．またサビパートは授業者もしくは児童生徒と協力して完成させていく．

①事前調査（9月11日～9月13日）

- 「教えて，あなたのこと，諏訪之瀬島のこと」

最初に，「諏訪之瀬島」というテーマに興味を持たせ，具体的なイメージを促すため，自己紹介シートを配布し，その記入を授業日までの課題とする．

②授業実践 第一次（9月14日・第4校時）

- 小学生「すわのせの詩を書こう」
- 中学生「Let's write a poem about your hometown Suwanose」

事前に調査しておいた自己紹介シートを，コメントを付けて返却する．そして授業者の自己紹介シートの発表後，諏訪之瀬島に焦点を当てて，目標である「曲作り」という主旨を説明する．小学生には，インタビュー形式や，テンプレートを基にした日本語の4行詩を書かせたい．中学生はテンプレートを基に英詩の仕組み（押韻や繰り返し）を参照した上で，4行英詩を書いていく．その際，ディスカッションを促す．

③授業実践 第二次（9月15日・第6校時）[本時]

- 「すわのせっこソングを歌おう」

完成した詞を発表披露する．また簡単なコーラスを入れて，演奏の中に子どもたちも参加させる．その後，ミニライブを催す．完成したオリジナル曲の他，子どもに伝えたい曲も時間があれば歌いたい．



詩を書く児童生徒たち



ギターの弾き歌い

5. 本時の学習

(1) 目標

日本語や英語で作詩することによって、言葉の持つイメージや音の成り立ち、リズムを知る。また詩本来の構成要素を知ることにより、豊かな言語運用ができるようにする。そして詩の発表を通して、伝えたいものを明確に表現し、郷土について相互の考えを理解し合えるようにする。

(2) 展開

時間	児童生徒の学習内容	教授活動	指導上の留意点
導入 15分	<p>●小1（グループA）、小3・4（グループB）、中1・2（グループC）の3つのグループに分かれて、着席する。</p> <p>*以降、グループAを（A）、グループBを（B）、グループCを（C）とする。</p>	<p>●事前に調査しておいた自己紹介シートを返却する。その際、一人ずつコメントを読み上げて渡していく。</p> <p>●授業者の自己紹介シートを、子どもに紹介するとともに、話題の焦点を諏訪之瀬島に当てていく。</p>	<p>●なぜ詩を書く必要があるのかを伝えられるように、曲作りをするということ、島について教えてもらいたいという二点を確実に子どもたちに理解させるようにする。</p>
展開 25分	<p>●各グループでの作業を始める。</p> <p>（A）諏訪之瀬島でしていることの中で好きなことを、絵に表して描く。</p> <p>（B）ハンドアウト第1行目を埋める。</p> <p>（C）詩の構造を知り、どんな詩にしたいかをイメージして、ハンドアウトの質問1を完成する。</p> <p>（B）ハンドアウト第2行目を書く。</p> <p>（A）授業者から、描いた絵についての質問を受ける。</p> <p>＜（A）作業終了＞</p> <p>（C）ハンドアウトの質問2を完成する。</p> <p>（B）ハンドアウト第3行目を書く。</p> <p>（C）テンプレートのコピーや、様々な例を基に、詩を完成していく。</p> <p>＜（B・C）作業終了＞</p>	<p>●単元の主旨を説明し、本時の学習内容、目標を確認。</p> <p>すわのせっこソングを作ろう</p> <p>①すわのせの詩を書こう</p> <p>◎「諏訪之瀬島のイメージを、自己紹介シートを参考にしながら、頭の中でイメージしてみてください」</p> <p>●机間指導を行う。</p> <p>●英詩のしくみ（押韻や繰り返しなど）を説明する。</p> <p>●項目に沿った質問をし、子どもの発言を聞き取って、文章化していく。</p> <p>●授業者も、できるだけ多くの例を用意する。また簡単にできる方法を、いくつか教えていく。</p>	<p>●語彙が出てこない場合を想定し、辞書を予め用意し、生徒にその使用を認める。</p> <p>●ペースが早い児童がいれば先に進ませる。</p>
結論 5分	●詩を完成する。	●次時の発表を促す。	

（２）実践報告

この項では、研修生としての率直な反省を述べる。

小学校一年生から中学校二年生までの幅広い発達段階の子どもたちに対して、一斉授業をさせて頂くことは、まさに小規模校における教育実践の真骨頂といえるが、正直なところ不慣れな私には、とても難しかった。しかも、それぞれに異なった課題を与えての展開である。予期せぬ子どもたちからの反応も、経験の浅い私には、時に試練であった。指導案通りに授業を進めることの難しさを感じると共に、授業を成功に導く具体的方策として、事前の予備調査や模擬授業を徹底することの重要性を学ぶことができた。

しかしながら子どもたちの想像力はすばらしく、第一次で行った作詩活動では、こちらの期待以上の作品を短時間に数多く生み出してくれた。音韻を取り入れたもの、郷土色が色濃く出ているものなど個性に溢れ、内容も、当方が目指すものとほぼ一致していた。

第一次では、①日本語や英語で作詩することによって、言葉の持つイメージや音の成り立ち、リズムを知ることが出来たか、②詩本来の構成要素を知って豊かな言語運用が出来るようになったか、が評価の対象であった。作文や感想文とは異なり、詩を作るためにはリズムを重視しなければならない。それを考慮に入れてテンプレートを作ったが、子どもたちに授業担当者の意図が上手く伝わらなかった部分は、そのまま作品に出てしまった。指導や板書によってカバーすべき点があったことは、素直に反省する。

第二次では、詩の修正と発表を行った。前回の反省を踏まえ、指導案の書き直しや板書の工夫をし、子どもの視点に立った展開に気を付けて進めていった。ここでの評価は、①詩の発表を通して、伝えたいものを明確に表現し、郷土について相互の考えを理解し合うことが出来たか、②詩の内容を深く理解した上で、本題を協力して考えることが出来たか、③児童・生徒間と教師のふれあいを持つことが出来たか、である。歌詞の修正作業に関して、子どもたちのみで行ってもらいたかったが、上手く修正できなかった箇所を私自身が提示する場面がほとんどであった。一方、発表においては、自分自身が行った授業の最大の成功場面といってよいであろう。詩を朗読するときのポイントをもとに、「伝える」ことを意識させた結果、聞き手からの反応が増え、相互理解を図ることが出来たと考える。

事前調査から2回にわたる授業までを通して見てみると、反省すべき点の印象が強い。しかし同時に、非常に個性豊かな面白い歌詞が出来上がり、発表によって話し手・聞き手の態度が養えたこと、タイトルから歌詞までほとんどが子どものオリジナルになったことなど、子どもの想像力や成長も垣間見ることができた。

そして何よりも、「曲が完成したこと」が最大の成果であった。



最後に歌詞カードをプレゼント

3. 研修全体を通して

(1) 研修内容

以下、滞在期間中の活動について、日を追って記述する。諏訪之瀬島に到着してまもなく、諏訪之瀬島分校の美化清掃に参加した。子ども、教職員、島民の方々による協同作業で、学校と地域が一体となった姿を最初に見ることができた。その後、教頭先生の案内を頂いて地域散策を行った。週が明けて、月曜日から本格的な研修を開始した。オリジナル授業以外の授業実践は行わず、授業観察や授業参加を主に小学校を中心に行った。また給食、掃除、学級活動にも意欲的に関わった。そしてこの研修を通して、分校や島の特徴について理解を深めた。ここでは特に述べておきたい授業等を紹介する。

9月11日(月)

中一音楽(3時間目)では、はじめに校歌を歌ってくれた。歌詞に「火山」が出てくることから、島の象徴的存在なのだと改めて考えさせられた。4時間目は中一英語。英語を専門とする教員がいないため、2人の教員が専門ではない同教科を分担して教えている。給食ではまず、全てが盛り付けられた状態のプレートを経由して給食室の小窓からもらう。小学部校舎2階にあるランチルームに各自配膳し、教員と子ども全員で「いただきます」と「ごちそうさま」を言う。必ず全員食べ終わるまで一人として席は立たない、という規律がしっかり守られていた。昼休みは決まって缶蹴りもしくはゲートボールが選択されていた。

9月12日(火)

この日は土曜日に行った草ひきの処理作業を掃除の時間に行った。島民総出で行ったにも関わらず、まだまだグランド状態が悪いという現状であった。何もかも一から作ったという学校らしさが最も出ていると実感した。夕方、教頭先生の紹介で、島の有力者のお一人とお話することになった。ご自宅にはたくさんの島太鼓があった。諏訪之瀬島で太鼓を作れるのはこの方ただ一人で、他にも竹細工などの特技をお持ちである。圧巻だったのは、柱や襖、冊子など全て手作りで、一つの部屋を全て自分で作りあげておられた。

9月13日(水)

複式形態の授業を見た最初の授業(小学算数)が2時間目にあった。先生によって手法は異なるとのことだが、このクラスでは、子どもを前向き、後ろ向きに座らせて、前後2枚の黒板を使って展開していくスタイル。小三は「量とかさ」、小四は「三角形」の単元であった。それぞれに課題を与えながらの授業スタイルなので、頭の切り替えが大変だとおっしゃっていた。続いて、運動会でソーラン節を踊るということで、地域の方も参加しての合同体育が行われた。目を惹いたのが、子どもがそれぞれ異なった体操服を着用し



小学校3・4年 算数

ていたことであった。同じ既制服がこの学校にないことに驚きを感じた。

9月14日（木）

初めて授業実践を行った。放課後、諏訪之瀬島分校の元教員で、トカラで計12年間も教員生活をされていた方のお宅を訪問した。先生の小学校時代のこと、集落のこと、教員時代のこと、フェリーとしまの歴史、教育のことなどについて様々学んだ。ここで先生は「子どもを甘やかしてはいけない」ということを何度もおっしゃっていた。自由な環境だからこそ、厳しさを教える人間が必要だということを説いていた。また学校が円滑に機能するためには、上から下へという組織作りをきちんと定めておくことも重要だということも教えて頂いた。

9月15日（金）

授業実践2回目。台風13号の影響を受け、次の週の半ばまで滞在し、実習期間を延長させて頂くことが決定する。夕食時、滞在している民宿に子どもたちが遊びに来る。島だからこそ感じるこのような人間関係の濃密な結びつきを、滞在期間中に何度も経験した。

9月16日（土）

午後にかけて風が強まってくる。小さな島は風の影響を受けやすく、波が想像以上にうねっており、恐ろしさすら感じた。少し早いおつかれさま会では、授業評価から研修全体のことまで、語り明かした。落ちこんでいたこと、それでもがんばってやってこられたこと等を全て話した時、やりきったという満足感がこみ上げてきて涙が出た。とにかく先生方のご指導がなければ、ここまでやってこられなかった。感謝の気持ちで一杯だった。

9月19日（火）

3連休を終えた最初の授業日であり、私にとってトカラ列島で過ごす最後の日であった。授業観察をしていると、先生が一つの本を見せてくれた。『諏訪之瀬島を開拓した人たち』というタイトルの本の中には、一時期無人島であった諏訪之瀬島を開拓した、藤井富伝を始めとした人たちについての記述があった。この諏訪之瀬島還住に関する記事は、藤井富伝一人が英雄視されているように思える文献が多い。しかしこの本は、還住後のことも述べてあり、作物が育たず島を出る人が多くなった厳しい環境下、諏訪之瀬島が発展してこられたのは、多くの人の不屈の精神、努力があったからであると記されていた。この考えが今の諏訪之瀬島における生活の根底にあるのだと納得した。子どもからの提案で、昼休みの遊びが、当初予定の缶蹴りからゲートボールに変更された。私が帰ることをみんな意識しているようで、この子どもからの提案も、自分自身のこと、島のことを私にもっと知ってほしいという願いから生じたものだろう。島の子どもたちのこのような純粋な思いに触れたことは、何よりも嬉しかった。



昼休みに行われたゲートボール

（２）研修を終えて

私にとって今回の研修の意義は、諏訪之瀬島の子どもを取り巻く環境を知り、学校を含めた地域の教育力を知ることにあった。確かに実習授業をすることは、教師としてのスキルアップや、子どもを知ることにつながっていく。しかしそれならば、何も離島での実習である必要はない。先生方が終始強調されていたことは、ここでしかできない学びの環境を体感することなのであった。学校はもちろん、地域や家庭の実態、そしてそれぞれがどう関連しているのか。そこに子どもはどう位置づけられるのか。このことについて考えることこそが、今回の研修における最大のテーマであった。

そこで重要なのが、学校と地域についてのへき地教育特有の視点である。実習生に対する講話の中で教えて頂いたことなのだが、まず「地域と学校は対等でなければならない」ということである。つまり地域から学校に対する一方通行な関係ではなく、地域と学校が近い存在だからこそ、学校からも要求することが可能な関係作りをしていかなければならないということであり、そのために地域をよく知る必要があるということを強調していた。

ここからは地域を語る上で重要な、教員（大人）と子どもの関わり合いを見ていく。この島では、昼休みの遊びに教員、子どもが全員参加する。しかも教員は、子どもは自分よりも力の強い相手の中に在って「もまれる」経験をする必要がある、という理由から本気で勝ちにいく。確かに子どもの数が少ない離島では、「年上＝リーダー」の構図になってしまいがちで、社会に出ると経験するであろう様々な苦労を味わえないまま、島を離れてしまう恐れがある。つまり「社会にもまれる」疑似体験を、教員が演出しているのである。

「決して子どもを甘やかさない」という信念を持って接している教員の姿が印象的だった。そしてそれは校内だけでなく、地域社会にあっても、大人は子どもに対して厳しく接していた。今の日本の教育に欠けているといわれる「叱る大人」の存在がこの島にはあり、その考えが学校と地域社会の双方にしっかりと貫かれているように感じた。

視点を教育から少し外してみる。諏訪之瀬島は、島外からやってきた様々な人たちが住んでいるという他のトカラ列島とは明らかに異なる点を有している。元々島に住んでいた家族に加えて、旧ヒッピーの家族、奄美大島から移住してきた家族、I ターンで移ってきた家族など多くの文化がこの島には存在する。出自の異なる集団をまとめることは容易なことではないが、島には学校という島人にとっての共通項があるのだ。人々が密接に関わりあって、学校が文化を作り上げていく担い手になることも大切ではないかと感じた。

今回の研修で、諏訪之瀬島や離島教育の全てを理解したわけではない。しかし教員を目指している私にとって、教育者としての新たな課題を発見することができたという点で、とても有益な実地研修であった。オリジナル授業を実践して、成し遂げられた点や反省すべき点を体験的に知ることによって、自分自身の教育者としての現時点での実力を理解することができた。そして島のあらゆる立場の人たちと接したことで、私自身の偏っていたのかもしれない考え方から脱皮することができたのではないかと感じた。この経験が役立つその時が来るまで、私は自己研鑽を続けていきたい。諏訪之瀬島の先住者たちのように。

おわりに

本稿の冒頭で、私は学校に限らずあらゆる教育環境の根底にあるものは、「伝える」と「対話」の二点であると述べた。対話とは単に話しかけることだけではない、相手が何を思っているのかを常に意識することが求められる。当然、伝えるということは非言語的なものも含まれている。私は諏訪之瀬島で、多くの方々と関わりを持つことが出来た。大切な人たちと巡りあうことが出来た。彼らが作り上げてきたものや、彼らとの思い出を誰かに伝える責任を、私は負ったと思っている。他者に還元するに足る、貴重な経験をさせて頂いたと思っている。

私は今、自分自身が生きていることを、自分の言葉で伝えていけるような教師を目指している。

最後に、この研修は様々な人たちに支えられて、成し遂げることができた。中井先生を始めとしたトカラ研究会の成員にいつも励まされ、大学院生の友人には勇気付けてもらい、家族は快く賛成してくれた。そして何よりも、常に親身になって世話をしてくださった教頭先生、本当に私自身のためにより経験をさせてくださった先生方、そして毎日笑顔を決やさず接してくださった島の方々に、心より厚く御礼申し上げます。



研修を終え、鹿児島に向けて離島する



諏訪之瀬島分校全教員、児童、生徒と

研修最終日に、滞在した10日間の無事に感謝して八幡神社に参拝へ行った。このトカラ列島には、何か不思議な自然の雄大さを感じた。都会にいと実感できない森信仰の神秘や、台風被害などに接して自然に対する無力さを感じると、八幡様に祈り、安全を祈願したくなる気持ちが生まれるのも分かるような気がしてきた。私が最後に神社へ足を向けたのも、そのような思いがあったからである。